

(投稿論文)

# 言語景觀から考える台中の多文化交流

## —台湾鉄道・台中駅を事例として—

吳素汝

### 摘要

本研究旨在調查台灣鐵路・台中車站及其周邊的語言景觀，並探討該場域之多元文化交流的現況。研究結果顯示，在公共標示與商業標示中，以華語與英語的雙語呈現為主流，反映出這兩種語言在台灣社會中的優勢地位。再者，台中車站及其周邊是東南亞籍居民聚集的區域之一，在部分的警示性及禁止事項等規範標示、解說標示與複合性標示中，可見印尼語、越南語或泰語等的語言並列。另外，研究也發現，鐵路售票機提供11種語言，台中地區的軌道運輸轉乘資訊公告則提供6種語言；台中車站及其周邊因具有歷史背景，亦被作為文化遺產加以保存與活用。

進一步分析顯示，台中車站及其周邊的語言景觀，不僅展現出與東南亞籍居民共同使用該區域的設施與空間，作為「夥伴」所形成的連帶感之功能；另一方面，也顯現出該區域的語言環境仍有不太完善之處。換言之，台中車站及其周邊的語言景觀反映了以華語與英語作為優勢語言為前提下的多元文化交流模式。

### 要旨

本研究は、台湾鉄道・台中駅およびその周辺の言語景觀を調査し、多文化交流の実態を考察するものである。その結果、公共的な表示と商業的な表示において華語と英語の2言語併記が主流であり、台湾社会におけるこの2言語の優位性が示された。また、台中駅およびその周辺は東南アジア出身の外国人住民が多く集まる地域であり、注意喚起や禁止事項を示す規制表示、解

説表示、複合的表示の一部において、インドネシア語、ベトナム語、タイ語による併記が見られた。さらに、鉄道の券売機では11言語、台中地区レール運輸乗換案内では6言語が提供されていること、また、台中駅とその周辺は歴史的背景等により、文化遺産として保存・活用されていることも明らかになった。

台中駅とその周辺の言語景観には、東南アジア出身の外国人住民と共にその地域の施設や空間を利用する「仲間」としての連帯感を共有する機能も認められる一方で、十分な言語環境が整っていない側面も確認された。すなわち、台中駅とその周辺の言語景観には、華語と英語が優勢言語として位置づけられていることを前提とした多文化交流のあり方が反映されているのである。

## キーワード

言語景観、多文化交流、台中駅、東南アジア諸言語、連帯感

## 1. はじめに

複雑な歴史的・社会的・政治的な背景から、台湾は多様な言語(台湾華語[以下、華語]<sup>1</sup>、台湾閩南語<sup>2</sup>、客家語、原住民諸語など)や文化など、様々な要素によって多元性・重層性のある社会を形成している。このような状況の中、急速なグローバル化の進展により、国境の壁が低くなり、人々の移動が活発化し、現代の台湾はより一層多言語・多文化社会へと向かっている。国際移動には、旅行や留学、結婚、労働、避難などによる移住形態があるが、外国人の滞在の長期化、定住化が進んでおり、私たちの身近に外国人を見かけることは、もはや珍しいことではなくなっている。

2024年11月末時点で台湾の人と結婚した外国人配偶者(中華民国の国籍を取得した者を含む)の人数<sup>3</sup>、出稼ぎを契機として台湾にきた外国人労働者の総数<sup>4</sup>は表1の通りである。

表1 台湾で暮らす「新住民<sup>5</sup>」の人口

	身分	人数	合計
外国人配偶者	中華人民共和国籍出身 (香港・マカオを含む)	38万8,940人	60万5,111人
	その他の国籍出身	21万6,171人	
外国人労働者	産業移工 (産業に従事する者) <sup>6</sup>	56万8,548人	81万7,228人
	社福移工 (社会福祉に従事する者) <sup>7</sup>	24万8,680人	

※ 外国人配偶者の国籍は中華人民共和国(香港・マカオを含む、64.28%)が最も多く、ベトナム(19.95%)、インドネシア(5.37%)、フィリピン(2.01%)、タイ(1.74%)、日本(1.00%)、カンボジア(0.73%)、韓国(0.38%)、その他(4.56%)の順である。

※ 外国人労働者の国籍は、インドネシア(30万1,549人)が最も多く、ベトナム(28万2,384人)、フィリピン(16万0,165人)、タイ(7万3,128人)、マレーシア(2人)の順になっている。

※ 行方不明の外国人労働者は2024年11月末時点で9万0,269人である<sup>8</sup>。

表1からわかるように、結婚や出稼ぎによって台湾に移り住んだ新住民の人口は140万人を超えている。その中で、結婚による移住は中華人民共和国籍出身者が過半数を占め、また、出稼ぎ労働による移住は東南アジアの国籍出身者がその大多数を占めている。いずれにせよ、彼らの増

加により、台湾社会における言語や文化は一層多様化している。そして言うまでもなく、街中で新住民の姿を目にする機会も多く、特に週末や休日になると、多くの都市の鉄道駅前の広場や鉄道駅周辺では彼らが集まる光景が見られる(松永2015, pp.171-174;張2022, p.89)。本誌特集で取り上げられている台中も、その例外ではない。

本稿では台湾鉄道・台中駅(新駅舎を指す、以下説明省略)を対象とし、まず台中駅構内とその周辺の言語景観の実態を、撮影した写真をもとに明らかにする。また、その実態を通じて、台中においてどのような多文化交流が映し出されているかについて考察する。

## 2. 先行研究

### 2.1 言語景観の定義

言語景観(英語では Linguistic Landscape)という概念は、一般的に「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」(Landry & Bourhis 1997, p. 23=訳は庄司2009, p.41)と定義されている<sup>9</sup>。Landry & Bourhis(1997)はまた、言語景観を形作る要素、および言語景観がもつ機能について次のように示している。

The language of public road signs, advertising billboards, street names, place names, commercial shop signs, and public signs on government buildings combines to form the linguistic landscape of a given territory, region, or urban agglomeration. The linguistic landscape of a territory can serve two basic functions: as informational function and a symbolic function. (Landry & Bourhis 1997, p. 25)

[公共道路標識、広告掲示板、街路名、地名、商店の看板、政府施設の標識などが複合し、それによって特定の領域、地域または都市圏の言語景観が形成される。言語景観には、主に情報伝達機能と象徴的機能という二つの基本的な役割がある。](訳は引用者)

上記の基本的な役割をさらに詳しく見ると、まず情報伝達機能は情報の提供に加え、その地域の言語的特徴や領域的境界、言語的境界を示している。これにより、その地域における言語の多

様性を反映するとともに、そこに居住する言語集団の社会言語的な情報(例えば、諸言語間の勢力関係や地位)を提供することができる。また、言語景観は諸言語間の勢力関係や、各言語の価値、社会的受容度を示す指標でもあり、その言語集団の活力を象徴するものともなる。言い換えれば、言語景観にその言語集団の言語が表示されていることは、その言語集団にとって肯定的な社会的アイデンティティの形成につながる。これがいわゆる象徴的機能である(Landry & Bourhis 1997, pp.25-29)。

また、庄司(2009)は、外国語を含む多言語(文字)によって形成される景観を「多言語景観」と呼び、看板、標識、ポスター、チラシ・張り紙・パンフレット、地図など、これらの掲示物(文字媒体)に記載される情報について次のように述べている。

社名・施設名、商品広告、警告・注意の喚起、広報、施設・機関等の利用案内、道路・地名表示などがあり、さらにこれらが二次的に担う、装飾、存在あるいは権威の誇示、認知、連帯、あるいは対立や排除の機能などがある。(庄司2009, p.26)

さらに、庄司(2009, p.37)によれば、多言語景観にみられる外国語表示は、場合によっては、それぞれの領域のマーカーとして機能するよりも、むしろそれらの複数の言語集団が協調してその場を維持していることがある。

以上のように、言語景観とは、公共空間におけるあらゆる表示に見られる文字言語、すなわち視覚化されたものの総体(集合体)を指しており、これらの表示が公共的な表示(道路標示、施設案内など商業目的ではないもの)と商業的な表示<sup>10</sup>(広告看板、店名表示など商業目的のもの)の2種類に分けられる(バックハウス2005, p.53、呉2022, pp.23-24)。また、それらの表示は情報を伝達するほか、言語の存在や勢力関係、言語集団の活力や対立、あるいは複数の言語集団の間の協調関係を示すこともある。よって、言語景観は地域や都市にとって不可欠な構成要素であり、その地域の言語環境にとどまらず、地域社会の構造や文化を反映するものと言える。

本研究では、上記の先行研究が示す定義に基づき、台中駅およびその周辺の公共空間に掲出された看板、標識やポスターなどに用いられている文字言語を取り上げる。また、言語景観は現地における言語環境と言語外的な側面(社会状況と文化交流)を表しているものとして捉える。

## 2.2 言語景観に関する事例研究

言語景観の研究は日本や韓国、中国において注目されており、地理学、社会言語学をはじめ、観光学、言語政策、言語教育などの諸分野において、研究・調査が活発に行われている(ロング2010, 2014; 磯野2012; 吹原ほか2019; 高ほか2016; 袁2022など)。また、海外の日本語景観を材料として、インドネシアにおける公共表示と民間表示に見られる日本語景観を表記の役割や誤用の観点から分析した研究(磯野ほか2013)や台湾の大都市である台北における私的表示を調査し、日本語の使用状況(日本語表記)を分析した研究(陳2019)がある。

台湾における言語景観の調査研究には、次のような事例がある。張(1999)は言語景観の概念を用いて、原住民言語の言語景観を構築する必要性を、文化資産、言語保存、言語権という3つの観点から検討し、その後社会的優位性をもたぬ言語の言語景観の構築方法および言語(文字表記)計画に関する提案を論じている。全体として、社会的に弱い立場にある言語集団の言語景観を構築することを、その言語集団の活力向上、言語使用場面の拡大、言語の伝承と保存を目的とした言語計画に取り入れるべきであると主張している。

何(2015)は言語復興と地理言語学の観点から、大都市である台中市(南屯区)と地方都市である花蓮県(花蓮市、吉安郷の2ヵ所)を対象に、言語景観(看板や広告掲示板、以下「看板」とする)における台湾閩南語の使用実態と、その使用が都市の規模(経済発展)や業種によってどのような違いを示すかについて分析した。その結果、台湾閩南語による表記の看板は台中市のほうが多いことが明らかになった。また、地域を問わず、飲食関係において台湾閩南語による表示が最も多く見られた。一方で、ファッション関係、医療・美容関係、自動車・バイク関係、宝くじ売り場やその他(娯楽施設、家具屋、眼鏡店舗、線香・金紙[金色の紙銭]を売る店など)においても台湾閩南語の表示が確認された。中でも、ビンロウを売る店では、台湾閩南語による表示よりも、華語による表示の看板が多数を占めていた。さらに、土地区画整理が行われていない地域のほうが従来の都市景観を保っており、台湾閩南語による表記の看板が多く見られたことから、土地区画整理の有無が、台湾閩南語の使用と深く関わっていると述べている。

蔡(2019)は台湾南部の大都市・高雄市にある勞工公園夜市(一徳路という街上の露店・屋台、合計313店、以下「店」とする)に着目し、そこに掲示されている看板に見られる言語の種類と言語使用の特徴を調査した。それによると、313店のうち、飲食関係が63.26%と最も多く、次いでファッ

ション関係(15.02%)、生活用品関係(10.54%)、その他(11.18%:娯楽、電子、サービス、ペット関連)となっていた。また、看板が掲示されていたのは239店(76.36%)であった。使用されている言語表示については、単一言語と複数言語の組み合わせ(二言語、三言語、四言語)が見られ、その中で華語のみ(69.46%)が最も多く、次に、「華語+英語(12.97%)」、「華語+日本語(6.28%)」、「華語+台湾閩南語(4.18%)」となっている。また、華語、台湾閩南語、日本語と英語の4言語を除き、フランス語、韓国語、マレー語の使用もあれば、華語の文字を借りて原住民語の用語を書き表すものもある。言語的特徴としては、①華語「的」という文字を日本語の「の」で置き換えて表記すること、②外国の料理や商品を扱う店の看板において外国語表示が多く見られるが、それらの表示には誤字や文法上の誤りがあること、③台湾閩南語を表記する際に、華語の文字または注音符号を借用すること、④価格や商品名の文字が店名より大きく表示されていること、および⑤顧客の注目を引くため、看板には商品の特色や魅力を示す広告的内容が多く含まれていることを報告している。さらに、看板に表示される言語の数(単一、複数)を問わず、華語の使用割合(97.9%)が最も高かったことから、華語は夜市における優勢言語であると指摘している。

また、吳(2022)は2021年12月に台中市にある外国人住民が多く集まる複合商業施設「東協廣場(台中小東南亞[台中のリトル東南アジア]とも呼ばれる)」に焦点をあて、外国人住民に向けた多言語表示(とりわけ公共的な掲示物)の特徴を調査した。その結果、東協廣場においては、華語の1言語による表示も見られるが、華語・英語・東南アジア諸言語(インドネシア語、ベトナム語、タイ語の3言語)を含む多言語併記が基本であることが確認された。中でも、タガログ語やマレー語を加えた表示もあれば、さらに華語を含まない複数の外国語による多言語表示もある。掲示物における言語の組み合わせは最大6言語にのぼり、特に東南アジア諸国の言語による表示が多いことが特徴である。また、東協廣場の外側には、喫煙禁止、環境を守ること、ごみ捨てに関するマナーなど、注意勧告を目的とした掲示物が多く見られることから、これらの表示は、外国人住民のマナー意識の向上と、地域における迷惑行為の防止に向けた取組を促進していることを示している。

今回は上記の研究(言語景観に見られる言語使用の実態や特徴に注目すること)を踏まえて、本稿では現地の言語環境(言語的特徴)にとどまらず、2.1節に示した観点、つまり、言語景観が映し出す言語外的な側面(社会状況と文化交流)についても考察する。

### 3. 調査概要

この調査は、2024年10月12日、10月24日、11月8日の三日間、いずれも日中の時間帯に実施した。そのうち、10月24日の調査は、筆者と友人1名(合計2名)で行った。データの採集場所は、台中駅およびその周辺とした。具体的には、駅構内(駅舎内の改札外エリアにある商業施設、および商業施設ではない警察局やインフォメーションセンターをも含む)、駅前のバスターミナル、台中驛(旧台中駅。以下「旧駅舎」と呼ぶ)、および旧駅舎前広場である(図1を参照)<sup>1)</sup>。

調査対象は、目視可能な範囲内において行政が設置した公共的な表示(施設案内や標識)、および商業的な表示(店舗の看板や広告)である。これらのデータは写真撮影によって収集したものである。なお、電話番号、ウェブサイトの URL、階数、施設の位置、バス路線案内番号を示すアルファベットや数字による表示は、分析対象外とした。



図1 データの採集場所範囲(枠で囲った部分)

### 4. 台中駅と駅周辺の言語景観

以下では、公共的な表示および商業的な表示に分けて、それぞれの特徴を分析するとともに、その言語景観の特徴を見ていく。また、言語景観からなにがみえるか、つまり、そこにどのような社会状況や文化交流が映し出されているかを考察したい。

## 4.1 公共的な表示

公共的な表示は、誘導表示(矢印を用いた方向案内)、記名表示(施設名や駅名など)、利用案内表示(地図案内、路線図)、規制表示(注意喚起や禁止事項)、解説表示(観光対象の歴史や由来、施設・設備の利用方法の説明)、複合的表示(例えば、施設の利用紹介ならびに注意事項が記載されるもの)などに分類される。

まず、台中駅構内における誘導表示、記名表示(警察局とインフォメーションセンターの看板を含む)は基本的に、華語と英語の2言語で併記されている(写真1)。これらの文字表記特徴として、英語表記は華語表記の下に配置されている。また、自動券売機は上記の2言語に加えて、日本語、韓国語、タイ語、インドネシア語、フィリピン語、ベトナム語、ドイツ語、フランス語とスペイン語、合計11言語対応となっているが、鉄道当局によって統一されたサービスである(写真2)。さらに、旧駅舎に新設された誘導表示の多くは、華語、英語と日本語の3言語で併記されている(写真3)。なおかつ、駅周辺に華語のみによる誘導表示も存在するが、その数は少ない(写真4)。



写真1 飲食店街の記名表示と台中駅構内の方向案内



写真2 台中駅構内の券売機



写真3 旧駅舎にある方向案内



写真4 飲食店街行きの案内

次に、利用案内表示の中で、駅周辺の地図案内では、道路名・施設名・設備名・地名が、華語と英語の2言語で併記されている。一方で、バスターミナルに設置されたバス路線図では、駅名(台中駅)のみが華語と英語で併記されており、それ以外の道路名や地名はすべて華語のみで表記されている。また、飲食店街の構内図では、標題にあたる「鐵鹿大街」および道路名だけが華語と英語の2言語併記であり、それ以外の部分は主に華語による店舗名で示されている。それだけでなく、飲食店街と台中駅構内には、それぞれ写真5と写真6のような避難路線図が掲示されている。

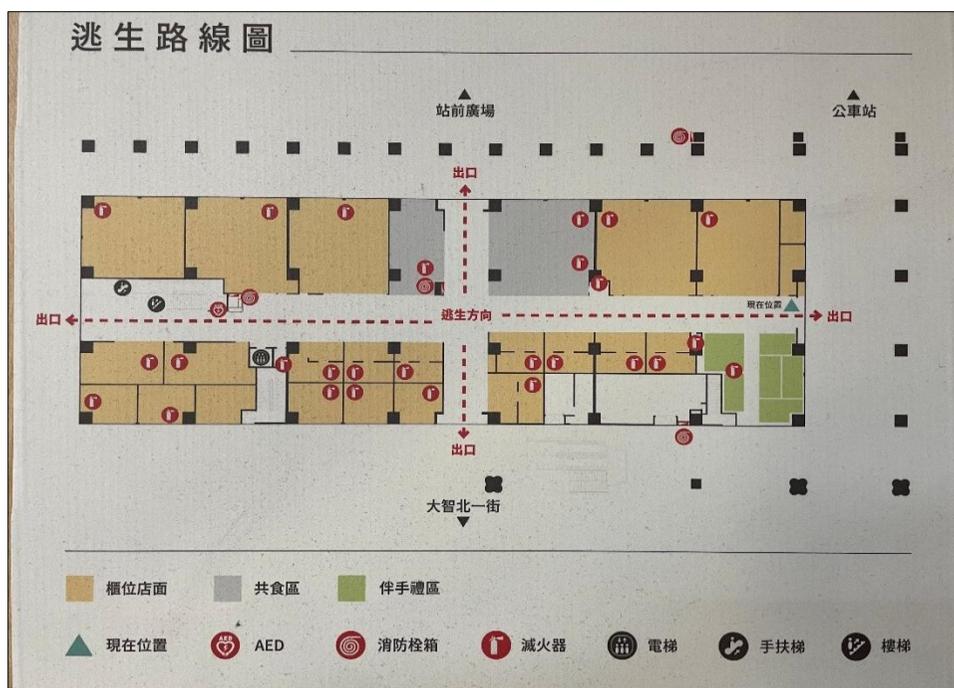


写真5 飲食店街にある避難路線図

写真5に示したように、飲食店街に掲示された避難路線図では、自動体外式除細動器 (Automated External Defibrillator) が英語の略称「AED」で表記されているほか、標題の「逃生路線圖」をはじめ、エレベーターや階段、現在位置、避難方向、消防などの設備に関する記号の説明はすべて華語のみで表記されている。これに対して、写真6の駅構内消防安全設備と避難路線図では、標題「臺中車站穿堂層消防安全設備及逃生路線圖(南向)」が華語のみで表記されて

いる。また、写真7(写真6の左下の部分を拡大したもの)を見れば、避難路線図内の設備や避難方向に関する記号の説明は華語と英語の2言語で併記されており、さらに、「如遇緊急狀況，請依指示方向疏散(In Case Of Emergency, Please Evacuate Toward The Direction Marked.)」という文が記号の説明の横に併記されて、赤字で華語と英語の2言語で記載されている。華語と英語の2言語による併記の特徴は前掲した台中駅構内における誘導表示、記名表示と同様に、英語表記は華語表記の下にある。

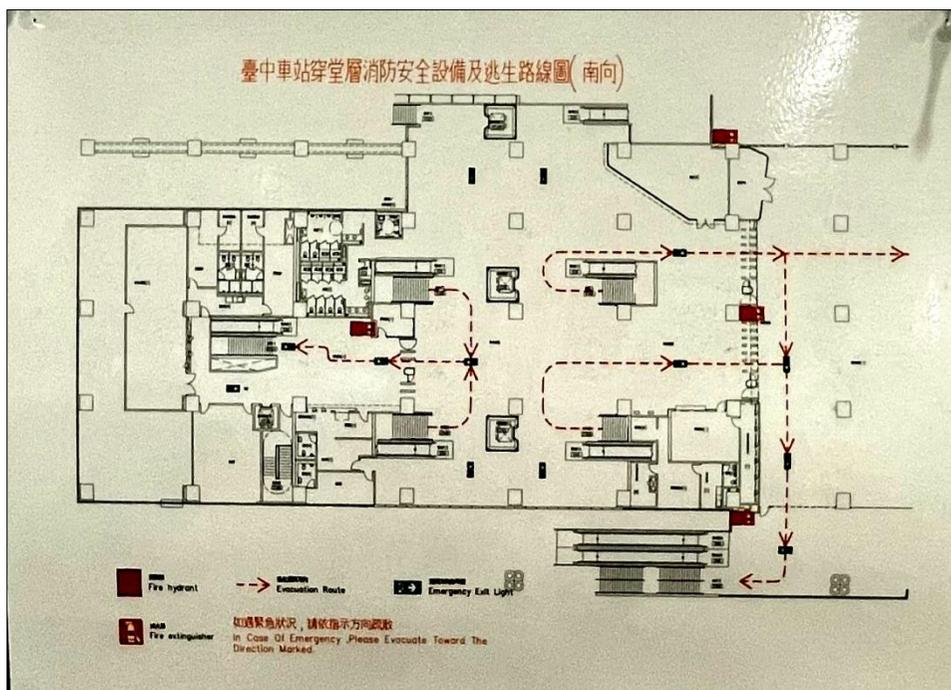


写真6 駅構内消防安全設備と避難路線図



写真7 駅構内消防安全設備と避難路線図の記号の説明

なお、利用案内に関連して、インフォメーションセンターに掲示されている営業時間とホットラインの情報は華語、英語、日本語と韓国語の4言語で併記されている(写真8)。また、同センター内に置かれているガイドブックも、基本的に上記の4言語で提供されているが、台中のバス利用や観光スポットに関するガイドブックには、タイ語とベトナム語も含まれている。ただし、タイ語とベトナム語のバージョンは「其他版本(その他のバージョン)」としてまとめて掲示されている(写真9)。



写真8 営業時間とホットラインの情報



写真9 ガイドブックに関する情報

続いて、規制表示、解説表記および複合的表記における言語数は表2の通りである。ここでの言語数とは、各看板、掲示物、張り紙に併記されている言語の数を指す。表2に示すように、規制表示には、華語と英語の併記が多く、また、華語のみによるものもあれば、3言語以上の多言語併記もある。その中で、華語と英語の併記は、関係者以外立入禁止、台湾鉄道の乗車マナー、階段利用時の注意事項やエスカレーター使用時の注意事項など、駅構内で頻繁に見られる。

表2 規制表示・解説表示・複合的表示の言語表記数

	規制表示	解説表示	複合的表示	合計
華語のみ	10	3	0	13
華語+英語	14	1	2	17
3言語以上	6	2	1	9
看板や掲示物の件数	30	6	3	39

華語の1言語で記された規制表示には、駅構内の空間利用の規範や禁止事項、環境を守ることに  
関する内容が多く含まれている。3言語以上による多言語併記には、言語文字の記載順を  
問わず、「華語+英語+インドネシア語+ベトナム語+タイ語」といった組み合わせが6つある。表  
示内容の具体例としては、トイレ利用時の注意事項(写真10)、喫煙・地面に座る行為・ごみ捨て  
の禁止(写真11)、踏切横断の禁止(写真12)などが挙げられる。なお、写真12は旧駅舎にあるも  
のである。現在の台中駅ホームでは、踏切横断禁止の表示は華語と英語の2言語で併記されて  
おり、その下に華語のみで「違法者は鉄路法第70条により、1万元以上5万元以下の罰金が科さ  
れる(引用者訳)」と記載されている。



写真 10 トイレ利用時の注意事項



写真 11 喫煙・地面に座る行為・ごみ捨ての禁止



写真 12 踏切横断の禁止

解説表示および複合的表示の件数が少ないが、華語の1言語の表示、華語と英語の2言語による表示、さらに3言語以上による多言語併記も確認された。それぞれの表示には、例として以下のようなものが挙げられる。解説表示は①～③、複合的表示は④と⑤である。

- ① 華語の1言語: 台中駅の歴史や車庫の保存について紹介された掲示物
- ② 「華語+英語+ベトナム語+タイ語+インドネシア語」の5言語: ICカードがロックされて使えない場合に、インフォメーションまでロックを解除することが掲載された張り紙
- ③ 「華語+英語+日本語+韓国語+インドネシア語+ベトナム語」の6言語: 台中地区レール運輸乗換案内が掲載された張り紙
- ④ 「華語+英語」の2言語: エスカレーターのスピードの紹介に加えて利用時の注意事項が記されたもの
- ⑤ 「華語+英語+ベトナム語+インドネシア語」の4言語: 台中駅および旧駅舎を中心として、鉄道の文化的・歴史的遺産があることに加えて、皆さんの安全ならびに利用者の権益のため、空間利用時の規範について紹介された掲示物

以上のように、公共的な表示において、内容種類を問わず、華語と英語の2言語による併記が最も多く使われていることがわかる。周知のとおり、台湾では多様な言語が使われているが、戦後国民党政府によって華語の単一言語教育政策が推進された。その結果、華語は台湾社会に広く浸透し、現在では多くの人々に使用される主要な言語となっている。また、看板や掲示物なども基本的には華語で表記されている。台湾閩南語、客家語および原住民諸語の教育が学校に導入されているものの、それらの文字表記が日常生活の中で広く使われるには至っていないのが現状である。この点から見れば、華語は他の言語と比べて社会的に優勢な地位を占めていると言えよう。

また、言うまでもなく英語は国際言語として認識され、広く使用されている。このことから、英語が常に華語とともに併記されるのは、迅速な情報発信を可能にするものと考えられる。他方で、旧駅舎は日本統治時代に建設された歴史的建造物であり、現在では観光スポットの一つとなっている。また、休日になると、台湾中部広域から東南アジア出身の外国人住民が鉄道を利用し、駅周辺にある「東協廣場」に集まってくる。換言すれば、観光客や外国人住民に対応するため、鉄道

の券売機のようなサービスのみならず、台中地区レール運輸乗換案内や鉄道の文化的・歴史的遺産に関する複合的表示、旧駅舎に新設された誘導表示には、英語以外の外国語も提供されている。特に、ベトナム語、タイ語、インドネシア語の3言語が併記されることが多い。

さらに、3言語以上が併記されている表示は、空間や施設の利用に関する禁止事項、注意喚起を目的とする掲示物に多く見られる。一方で、災害時の避難路線図には、華語と英語の2言語、あるいは華語の1言語で記されており、英語圏以外の外国人住民や観光客、特に華語や英語があまりできない人々にとっては、直ちに理解できる掲示物とは言いがたいことが明らかになった。

## 4.2 商業的な表示

商業的な表示は駅構内(改札内)、飲食店街および旧駅舎にある店舗の看板に注目した。店舗は飲食関係の店が31店であり、コンビニが3店(うち、2店は同じ)であり、レンタカーが2店であり、その他が8店(ポップアップストア、コインロッカー、生活・化粧品関係、健康食品関係、ゲーム関係、ガチャガチャ関係、バス関係。そのうち、バス関係が2店)、合計44店である。

前節には、飲食店街の構内図において、店舗名の多くが華語のみで示されていると述べた。しかし、一つ一つの店舗の看板を確認し、その結果は次の表3の通りである。

表3 店舗看板の言語表記数

	飲食関係	コンビニ	レンタカー	その他	合計
華語のみ	7	0	1	0	8
英文のみ	1	1	0	0	2
華語＋英語	14	2	1	6	23
華語＋日本語	2	0	0	1	3
華語＋英語＋日本語	4	0	0	0	4
その他の言語種類	3	0	0	1	4
店舗の件数	31	3	2	8	44

表3からわかるように、店舗の看板は華語と英語による2言語併記が最も多い。また、華語もしくは英語の1言語のみによる表記もあれば、「華語+日本語」と「華語+英語+日本語」のように日本語の文字(ローマ字表記を含む)による表記もある。その中で、英語の1言語は「SUBWAY」と「7-ELEVEN」であり、すなわち店舗の名称のままで掲示されている。そして、日本語の文字が併記されているのは日本と関わっている飲食、「小林」ということばやガチャガチャの店である。ただし、看板に複数の言語による併記が多いが、華語の文字サイズが最も大きく表示されているものが少なくない(写真13)。なお、英語の文字サイズが華語の文字サイズより大きく表示されている店舗がある(写真14)。



写真13 カレーが欲しいという飲食店



写真14 天子スフレという店

その他の言語種類については、それらの店舗名は「TIKIYALO」、「胖胖猪 pan pan ju」、「青釉茶事 Chin Yo Cha Shi」、および「拍拍生活美妆旗舰店 WELCOME PAIPAI」である。「TIKIYALO」はアルファベット表記であるが、実はそれは「鉄道」ということばの台湾閩南語の発音を表している。また、「胖胖猪」と「青釉茶事」は華語とピンイン表記の2種類で併記されており、「拍拍生活美妆旗舰店」は華語、英語とピンイン表記(「拍拍」の2文字のみ)の3種類で構成されている。

さらに、南洋料理の店のドアに、写真15に示すように、17か国の国旗の下に、諸国の言語で「いらっしゃいませ」と書かれた表示が掲示されている。しかし、この箇所を除くと、駅構内や飲食店街の店舗の看板には、東南アジア出身地域の言語表記はなかった。確かに、駅構内や飲食店街には東南アジア関連の店舗がほとんど存在せず、また、店舗名をそのまま看板として掲示する形式が一般的であることから、4.1節で見られたような、東南アジア諸言語を含む多言語併記は商

業的な表示にはほとんど見られないと考えられる。

そもそも、東南アジア出身の外国人住民は、これらの店舗を実際に利用しているのだろうか。現地観察の結果によると、駅構内の空間や施設、コンビニなどは利用しているが、多くの東南アジア出身の外国人住民は「東協廣場」へと向かっていることがわかった。すなわち、駅構内や旧駅舎では彼らの姿をよく見かける一方、これらの店舗の看板表示は彼らの来店を促すものとしては機能していないと言わざるをえない。



写真 15 Satay By The Bay という店

### 4.3 言語景観からなにがみえるか

これまで台中駅およびその周辺における公共的な表示と商業的な表示の特徴を見てきた。その中で、華語と英語の2言語併記の掲示物が多いことから、華語と英語の2言語は台湾社会において優勢言語であることがうかがえる。一方、英語以外の外国語の表示(例えば日本語、韓国語)、特に東南アジア出身の外国人住民の言語表示の出現は、東南アジア諸言語とそれらの話者の存在を直接的に反映するものである。これは彼らの言語や言語権が保障されていることを示している。

続いて、旧駅舎における誘導表示に日本語の表記が追加され設置されていること、ならびに、鉄道の文化的・歴史的遺産の保存のため、空間利用時の規範案内に「華語＋英語＋ベトナム語

＋インドネシア語」の4言語による記載があることから、当該地域の文化遺産を大切に保存、活用しようとする姿勢が見られる。しかも、それは東南アジア出身の外国人住民との連帯感をもち、共に守っていこうとする姿勢でもある。また、4.1節でも示したように、台中駅とその周辺において東南アジア出身の外国人住民に向けた多言語併記は、空間や施設の利用時の規範、環境を守ることに関する規制表示が中心である。多言語・多文化共生づくりの視点からいうと、このような規制表示の多言語併記は、外国人住民と共にその地域の空間や施設を利用する「仲間」としての連帯感を図り、当該地域における迷惑行為の防止やマナーの向上を促す役割を果たしていることが読み取れる。この点については、呉(2022, p.27)でも同様に指摘されている。

他方、災害時の避難路線図や店舗の看板には、華語の1言語、もしくは、華語と英語の2言語による表示が主流である。このような状況は、前述の多言語・多文化共生づくりの視点とは一致しない面があると言える。店舗の看板はともかく、避難路線図においては、英語以外の外国語をすべて併記することは困難であり、仮に併記できたとしても、視認性がかえって悪くなる可能性がある。しかし、当該地域に暮らす外国人住民、そこを利用する、あるいは通り過ぎる外国人が安心・安全に過ごせるという視点から考えると、防災や避難に関する情報は多言語で提供する必要があると考えられる。

袁(2022, p.198)が指摘しているように、近年では言語景観において QR コードの使用がよく見られる。また、言語共生を推進するための共生社会を構築できる可能性について検討した穆(2024)では、「多種多様な表示に言語別の QR コードを埋め込むことができれば、その QR コードから国籍を問わずすべての人々が適切な言語で情報を獲得することができる」(穆2024, pp.103-104)という共生社会の言語景観モデルが提示されている。筆者は QR コードを活用し、可視空間に収まりきれない多言語による情報発信を可能にする取り組みに賛同する。ただし、上述したように、外国人住民が安心・安全に過ごせる言語環境を提供するためには、あらゆる掲示物ではなく、例えば防災や避難に関する情報や施設の利用時の注意事項が記載される掲示物に、多言語の QR コードを埋め込むのが望ましいと考える。

## 5. おわりに

以上、台中駅とその周辺の言語景観における言語特徴を分析したうえで、そこに映し出される

多文化交流の様相を考察した。

その結果、公共的な表示および商業的な表示において、華語と英語の2言語併記が最も一般的に用いられており、台湾社会におけるこの2言語の優位性が改めて確認された。さらに、東南アジア出身の外国人住民が集まることを反映するように、特に公共的な表示(規制表示、解説表示、複合的表示)の一部には、ベトナム語、タイ語、インドネシア語が併記されていることも明らかになった。

台中駅とその周辺は、歴史的背景や観光地としての価値を備えており、文化遺産としての保存・活用が意識されていることがうかがえた。観光の促進とも関係している可能性はあるが、鉄道の券売機や台中地区レール運輸乗換案内では、東南アジア諸言語以外の外国語も提供されている。

また、多言語・多文化共生の観点から見ると、注意喚起や禁止事項など規制に関する多言語併記は、当該地域の空間や施設を利用する「仲間」としての連帯感を共有する役割を果たしている。一方で、避難路線図の言語表記の現状と照らし合わせると、当該地域の言語環境は外国人住民にとって依然として不十分であると言わざるをえない。この点に関しては、外国人住民が安心・安全に過ごせる言語環境を提供するために、必要とされる掲示物に限定して QR コードを活用し、多言語対応を実現することが一つの可能性として考えられる。

全体としては、台中駅およびその周辺の言語景觀には、東南アジア出身の外国人住民の存在や言語権の尊重がある程度認められる一方で、華語と英語の優位性が前提とされている多文化交流のあり方が映し出されていることが明らかとなった。本研究では台中駅とその周辺の言語景觀を取り上げて、そこにあらわれる多文化交流と社会状況に注目したが、対等・平等な関係を築き、外国人住民と共に交流・共生の言語景觀づくりや言語政策において改善が求められる。そのため、今後は、本研究の結果をもとに、事例数をさらに増やし、各地域における言語景觀の実態を把握するとともに、それらの地域に集まる人々の受容度や理解度についても調査し、言語政策や利用者の立場から、言語景觀づくりについて検討を行っていきたい。

(吳素汝 ご そじょ 東海大學日本語言文化學系)

## 参考文献

[日本語文献]

磯野英治(2012)「言語景観から読み解く多民族社会—韓国ソウル特別市における外国人居住地域からの分析—」『日本語研究』第32号、pp.191-205。

————(2020)『言語景観から学ぶ日本語』大修館書店。

磯野英治・丁美貞・佐々木未華・アニサ, アリアニンシー・エカ, マートラ ホイルニサ・レカ, デラ  
フィトラティ(2013)「言語景観にみるインドネシアの日本語の現状と役割」『日本語研究』第33号、pp.113-122。

袁帥(2022)「言語景観と言語政策に関する考察—中国と日本を例として—」『東アジア文化交渉研究』第15号、pp.189-208。

高民定・温琳・藤田依久子(2016)「韓国済州島における言語景観—観光と言語の観点から」『人文社会科学研究、千葉大学人文社会科学研究所』第30号、pp.1-23。

呉素汝(2022)「台湾在住外国人に向けた多言語表示—台中東協廣場の調査から—」『言語文化共同研究プロジェクト2021: 批判的社会言語学の深化』、pp.23-32。

庄司博氏(2009)「多言語化と言語景観—言語景観からなにがみえるか」庄司博史・バックハウス, ペート・クルマス, フロリアン編著『日本語の言語景観』三元社、pp.17-52。

————(2013)「多言語景観」多言語化現象研究会編『多言語社会日本 その現状と課題』三元社、pp.283-286。

張佩茹(2022)「日本における台湾華語教育」『交流』第970号、pp.19-24。

陳順益(2019)「台北における日本語の言語景観—誤用分析及び言語使用を中心に—」『中日文化論叢』第36期、pp.21-43。

バックハウス, ペート(2005)「日本の多言語景観」真田信治、庄司博史編『事典: 日本の多言語社会』岩波書店、pp.53-56。

吹原豊・松崎真日・磯野英治・助川泰彦(2019)「韓国安山市の多言語景観調査にみる言語景観研究の現在と可能性」『ことばと文字』第11号、公益財団法人日本のローマ字社、pp.21-57。

- 松永稔也(2015)「監視されるショッピングモール—外国籍住民の集聚地・集結地の諸相および台中における移民監視の継続をめぐる—」『多元文化交流』第7号、pp.170-195。
- 穆鈺(2024)「栃木県宇都宮市の言語景觀をめぐる研究—共生社会の言語共生を考える—」『共生社会システム研究』第18巻第1号、pp.89-106。
- 林初梅(2014)「〈華〉という概念のもつ意味合い—台湾小中学校言語教育をめぐる〈華語〉〈国語〉論争からみて—」『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』No.2014-3、pp.1-15。
- ロング, ダニエル(2010)「奄美ことばの言語景觀」内山純蔵、中井精一、中村大編『東アジア内海の環境と文化』、日本海総合研究プロジェクト研究報告5、桂書房、pp.174-200。
- (2014)「非母語話者からみた日本語の看板の語用論的問題—日本語教育における「言語景觀」の応用—」『人文学報』第488号、pp.1-22。

[中国語文献]

- 何信翰(2015)「本土語言與商業利益的結合—台中和花蓮的台語看板研究」『台灣文學研究』第8期、pp.153-187。
- 蔡孟楡(2019)「夜市看板之語言景觀調查—以高雄市勞工公園夜市為例」『高雄文獻』第10巻第1期、pp.111-132。
- 張學謙(1999)「語言景觀與語言保存規畫」『台東師院學報』第10期、pp.155-172。
- 張春炎(2022)「台灣的東南亞族裔地景與媒體再現」『傳播文化與政治』第15期、pp.87-112。
- 勞動部・勞動法令查詢系統(掲載年不詳)「法規名稱:促進新住民就業補助作業要點(民國111年05月03日修正)」、  
<https://laws.mol.gov.tw/FLAW/FLAWDAT0202.aspx?id=FL046924>、最終閲覧日2025年1月8日。

[英語文献]

- Landry, Rodrigue & Bourhis, Richard Y. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology, Vol. 16 No. 1*, pp.23-49.

## 注

<sup>1</sup> 本稿において用いる台湾華語とは、台湾で使われている繁体字中国語を指す。なお、1945年の日本敗戦後、国民党政府が台湾に持ち込んだ中国語を「国語(グォユイ)」として位置づけ、国語政策を推進した。林(2014, p.3)によれば、国語は北京官話を基礎にできたものであり、ある種の中国(中華民国)支配の象徴の意味を持ったが、国語という表現が知らぬ間に台湾の人に中国語の代名詞として使われるようになった。他方、華語は元々東南アジアの中華系の人に使われる中国語を指すものであるが、台湾では外国人向けの中国語教育の場合に用いられる表現である(張 2022, p.19)。しかし、林(2014, p.9, p.12)が指摘しているように、2000年以降は言語の多元性と相互尊重が重視されるようになり、台湾社会の多言語化の進展の過程において、これまで華僑・外国人向けに使われていた「華語」という呼称は国内向けの中国語を指す言葉として使われる場面が現れるようになった。

<sup>2</sup> 台湾閩南語という言葉は、「ホーロー語(福佬語/河洛語)」あるいは「台湾語(台語)」と呼ばれることがあるが、用語をめぐる混乱を避けるため、本稿ではすべて「台湾閩南語」で統一して記述する。

<sup>3</sup> 中華民國內政部移民署(統計資料作成日 2024/12/12)「113年11月外籍配偶人數與大陸(含港澳)配偶人數按證件分 11311」、  
<https://www.immigration.gov.tw/5382/5385/7344/7350/8887/?alias=settledown&sdate=202411&edate=202412>、最終閲覧日 2025年1月8日。

<sup>4</sup> 労働統計查詢網(掲載年不詳)「産業及社福移工人數按國籍分(113年11月)」  
<https://statdb.mol.gov.tw/statiscla/webMain.aspx?sys=220&ym=11310&ynt=11311&kind=21&type=1&funid=wq1402&cycle=41&outmode=0&compmode=0&outkind=11&fldspc=0,24,&rdm=R127035>、最終閲覧日 2025年1月8日。

<sup>5</sup> 台湾では「新住民」とは中華民国の国籍をもつ者と結婚するとともに、台湾に居留する許可を取得している外国人配偶者及び、結婚相手(中華民国の国籍をもつ側)が死亡または二人が離婚したが、法律の規定にしたがって台湾に居留し働いている者を指す(労働部・労働法令查詢系統により)。しかし他方では、出稼ぎを契機として台湾にやってきた外国人労働者が多くおり、彼らも台湾で生活している。よって、本稿で言う「新住民」とは国際結婚や労働を目的として台湾に移り住んできた者(外国人配偶者・外国人労働者)を指している。

<sup>6</sup> 従事する産業は、製造業、建築業、公共工事、農林漁牧業、船員などが含まれる。

<sup>7</sup> 従事する社会福祉は、高齢者を介護する介護士と家政婦の2種類である。介護労働者の場合は施設で就労する者もいれば、自宅で住み込みで雇用される者もいる。

<sup>8</sup> 中華民國內政部移民署(統計資料作成日 2024/12/20)「113年11月失聯移工按職業別統計表 11311」、  
<https://www.immigration.gov.tw/5385/7344/7350/8943/?alias=settledown&sdate=202409&edate=202412>、最終閲覧日 2025年1月8日。

<sup>9</sup> 原文は、「Linguistic landscape refers to the visibility and salience of languages on public and commercial signs in a given territory or region.」(Landry & Bourhis 1997, p. 23)。

<sup>10</sup> 商業的な表示はまた、私的表示(バックハウス 2005)、民間表示(磯野 2020)という名称も使われている。

<sup>11</sup> 図1は、Google マップを呼び出して「台中火車站」という言葉で検索した際の地図である。ただし、データの採集場所を示すために、図1にある枠は筆者によって加えたものである。